

令和 5 年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和 6 年 3 月
岩手県教育委員会

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：洋野町立大野中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

洋野町大野地区は岩手県の最北部久慈・軽米の二市町に隣接するのどかな丘陵地であり、なだらかな地形を生かした県内でも有数の酪農地帯である。本校では「緑豊かな大地に生き、自然とともに歩んできた洋野町の歴史や文化に目を向け、学ぶことを通して自分たちの生まれ育った地域に喜びと誇りを感じ、たくましく生き抜くことができる人間を育てる」ことを目的とした教育活動「ひろの学」を展開している。気候や地形によってもたらされた洋野町の自然の美しさや恵みの豊かさ、地域の特性を生かした地場産業やそこに生きる人々の姿、また震災復興への歩みや環境を守り、次世代に伝えていくことの大切さについて体験学習を通して学ぶことを目的として本事業を実施した。

II 取組の概要

1 震災学習列車活用した被災地見学

(1) 三陸鉄道「震災学習列車」乗車

三陸鉄道の社員の方が乗車し、久慈駅から田野畑駅まで乗車した。震災当時の各駅付近の被災状況、鉄道復活の道のり、現在の津波対策等についての説明を聞いた。三陸鉄道は震災で線路も列車も流され、再び列車を走らせることは無理であると思われていたが、地域住民や地元企業自衛隊の支援を受けて震災から5日後に列車を走らせた。困難な状況であるにもかかわらず、列車を走らせたことは被災した方々に勇気をあたえた。三陸海岸の美しい景色を見ながら、当時の三陸鉄道復興にかける熱意と社員の方々の思いを聞くことができた。



(2) 「たのはたジオパークガイド」

NPO 法人体験村・たのはたネットワークの職員の方から説明を受けた。田野畑には化石を含む地層が多くあり、自分たちが住んでいる大野地区も海面が隆起してできた海成段丘という地形であることから、海からつくられた地形を生かしながら暮らしを営んでいることは田野畑村と共通していることがあると感じた。また、津波によって流されてきた巨大岩や、明戸海岸には壊れた防潮堤が当時のままに残されているのを見学し、津波の脅威について改めて知ることができた。



(3) 学ぶ防災

県内で甚大な被害を受けた宮古市田老地区を見学研修した。ガイドの方から田老地区の防災面における工夫や復興の現状について説明を受けた。津波遺構「たろう観光ホテル」においてホテルで撮影された津波映像を視聴した。車で避難し立ち往生しようになっている映像を見て、津波の規模の大きさを現実のものとして捉えることができた。「防潮堤は逃げる時間をつくるもの。命を守る大切なものである。」と説明をうけた生徒たちは、防災・減災の大切さについて改めて考えることができた。



2 震災から復興した地元企業の見学

(1) 北三陸ファクトリー

洋野町種市地区も震災では大きな被害を受けた。「北三陸ファクトリー」は震災1年前に創業した種市にある水産会社である。津波により大きな被害を受けたが、社員の方の「地域と水産業の未来のために」という熱意の下、震災から復興した企業である。地球温暖化、磯焼けなどの海洋問題を解決するためにウニの再生養殖（ウニ牧場）を確立し、世界に向けて洋野町のウニについて発信している企業が地元にあることを知った生徒たちは、洋野町の自然の豊かさについて考えを深めることができた。



3 生徒の感想より

・震災学習列車に乗り野田村を通りました。野田村は村内の8割が津波の被害に遭ったそうです。同じ村内でも被害を受けなかった場所もあることを知りました。列車から見えた広い公園が震災前は住宅地だったことを教えてくれました。現在、その場所は広い公園になっています。もし、津波が来たときは、お椀型の形状になっている公園に海水を溜めて津波の被害を広げないように対策していることを知りました。

・震災学習で学んだことは、自分の命を守るということです。震災で多くの方が亡くなり、現在も行方不明の方がいることも知りました。そして被害にあわれた地域の方々が、復興に向けて一生懸命頑張ってきたことがわかりました。東日本大震災当時の記憶はほとんどないけど、震災のことは絶対忘れてはいけないことだと思ったし、自分の命について考えることができました。

・北三陸ファクトリーはウニを中心とした海産物を扱っている水産加工会社であり、世界で唯一のウニ牧場を作った会社であることがわかりました。震災で漁業が出来なくなりましたが、復興をきっかけに、北三陸の食材が世界に発信できることを確信したと説明してくれました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

東日本大震災から12年経過し、当時の記憶がほとんどない生徒たちにとって、被災した現場を訪問し、体験された方々のお話を見聞きする機会は大変貴重であった。事前学習で「いきる かかわる そなえる」の副読本を使用し当時の状況についての知識は少しあったものの、震災の爪痕、復興の様子を見て、それぞれの場所や立場で遭遇した津波の影響、復興までの過程を知り、自他の命を守るために大切なことや多くの方々の支援があって復興が進んできたことなど、震災への理解を深めることができた。

本事業を通して、生徒は洋野町が東日本大震災時、岩手、宮城、福島3県の沿岸自治体で唯一、死者・不明者がゼロだったことを知り、訓練の大切さや防災に対する意識を高めることができた。また命の尊さについて深く考える機会となった。

2 課題

津波や地震だけでなく、近年は風水害、雪害等の災害も増えてきている。どのような災害に対しても臨機応変に対応できるように、普段からの避難訓練を通して防災に関する知識や関心を持たせること、また個々の生徒が災害への備えを考えていくことが大切であると思われる。また、その際には地域とのつながりが大切なものとなっていくため、様々な活動を通して地域の方々との交流・連携が図られるよう実践的な体験を学びの場として考えていきたい。

震災学習列車を活用した学習は本校生徒にとって海にかかわる人たちから多くのことを学び、地域や社会について視野を広く持つことができた機会であった。

今後、この学習を事後に地域学習のどのような点と結び付け、生徒の思考を深化させていけるか十分に検討していきながら、次年度の継続を考えていきたい。

